

12年を振り返って「呆れ果てても諦めず」

2023.10.5

NPO 法人ふくしま支援・人と文化ネットワーク

理事長 神田香織

2011年3月11日の東日本大震災で故郷福島県は地震、津波、そして東京電力福島第1原発事故による放射能被害と未曾有の大災害に見舞われてしまいました。連日の報道はすさまじいほどでしたが、やがては報道や支援が少なくなり人々の記憶から遠ざかってしまう、それを食い止めるには、と私が危惧したのは「はだしのゲン」や「チェルノブイリの祈り」など、放射能被害の実態を講談という形で訴えてきたから、かも知れません。

芸人ゆえ特定非営利活動法人、いわゆるNPOとは無縁の立場でしたが、こうなったからにはNPOを立ち上げ組織だって支援を続ける必要があるのではと一大決心。神奈川県でアジア支援活動をしているWE21ジャパンの理事長、高校の先輩でもある郡司真弓さんに相談をもちかけたところ、「やりましょう」と二つ返事。福島の人たちと、福島原発の電力を消費してきた首都圏の市民を文化活動で繋ぎ、架け橋になりたいと、その年の10月にJICA広場202号室にてNPO法人「ふくしま支援・人と文化ネットワーク」は産声をあげたのでした。講演会は小高商業高校長齋藤貢一さんの現場報告。福島には過酷な未来が立ちふさがっている。「ひとりだと気弱になる。繋がれば力になる。感性豊かにしつこく支援」こうして始動し始めたのでした。

それから12年、様々な活動で福島支援を続けてきた当会でしたが、3年前からのコロナ禍によりほとんどの活動を中止せざるを得なくなり、解散の運びとなったのは誠に残念です。しかし、会員の皆様との様々な体験は私たちの歴史であり誇りでもあります。今後もそれぞれができる範囲で支援を続けていくことには変わりはありません。

さて、岸田政権は原発回帰に舵を切り、汚染水の海洋放出を決行してしまいました。こんな時だからこそ、「脱原発」で盛り上がった2012年当時を思い起こして元気になっていただければと思います。当会の広報誌「此処彼処」Vol.3（2013年3月号）に掲載の「一年を振り返って」を紹介します。

【2012年は脱原発の機運が盛り上がり、当会も予想以上の活動を展開できた年でした。思いつくだけでも、1月は世界中が結集した脱原発世界会議、当会もいわきから「日々の新聞社」の安竜昌弘氏を招き立ち見ができるほどの盛況。3月には新宿スペースゼロにて福島の子供たちの絵画展「3.11あのね。」を開催。いわき市の農家との交流、援農ツアー。5月には「裸のフクシマ」の著者たくきよしみつ氏の講演会。9月はチェルノブイリミッションツアー、12月には高橋哲哉氏、佐藤和良氏を招いて当会主催の講演会とトーク。下北沢の「香

織チャンネルイン音倉」ではいわきゆかりの「フラガール物語」「安寿と厨子王」など3回のライブ。支援 T シャツも予想以上に売れて、子供たちの保養事業に弾みがつき、リフレッシュハウスを利用された皆さんからの感謝のメール、手紙などに私たちも感動、と、当会だけでもこれだけの活動ができたのですから、日本中でさまざまな取り組みが展開され、毎週金曜日には東京では官邸前後、国会周辺行動、各地でも集会が開催と大きなうねりになったのは言うまでもありません。私は確信します、NPO を立ち上げて本当によかったと。当初からのキャッチコピー「ひとりだと悲しくなる、つながれば力になる」！これからは正念場です、智慧の使いどころです。脱原発をめざし、今年も「闘いはたのしく、明るく、しつこく」です。一緒に繋がっていきましょう！】

皆様、長い間当会と共に福島支援に携わってくださり、本当にありがとうございました。当会は解散しても、これからも皆様とともに原発のない社会を目指すことにかわりはございません。「呆れ果てても諦めず」でともに繋がって参りましょう。